

シンポジウム「新教育運動と子どものこれまで・これから」

「自立」概念の変遷に見る 青少年像

独立行政法人国立青少年教育振興機構

青少年教育研究センター

大山 宏

本報告の目的

- 教育の場において、青少年の存在はどのように位置づけられてきたのか。
 - 「自立」をキーワードとして「これまで」を検討する。
 - 「自立」は現在に至るまで用いられ続けてきた用語だが、何をもって「自立」したとみなすかは変化し続けてきた。
 - 学校教育だけでなく、「こうなって欲しい」という意図を持った営為全般に関わる問題として。

本報告の目的

- 「自立」のイメージを学生に聞くと、経済的自立・職業的自立のイメージが非常に強い。
 - 「自立≒孤立」という観点からの批判も少なくない。
- 現代社会で生きていくことは、孤立しても大丈夫なあり方を求められることなのか？
- 「望まれる生き方」をめぐって、どのような論点があるのか？

「自立」の黎明期

- 「自立」という言葉が若い世代のあり方と結びついた初期の記述として、1880年代後半から1890年代の、各地の青年会によるものがある。
- 1880年代後半は「青年」概念が登場した時期でもあったが、当時の青年は主に学生・書生等の一部のエリート層を指す概念であった。多くの青年会も、こうした青年有志で結成された組織である。

「自立」の黎明期

大阪有為会による
「青年」第2号（1889）

国立国会図書館所蔵

- 確認できる最も古い、「自立」に言及した青年会の一つが「大阪有為会」である。
- 明治維新頃の藤田東湖や吉田松陰を「熱心自立の気に富み豪然自負の精神に裕かなるの人」と表現し、こうした存在が日本独立の基礎だと言及。

我国昔日の如く攘夷を唱え頑固独立を謀るか如きは素より迂にして取るに足らずと雖ども然れども唯だ**自立の精神**なく国權萎微常に彼れ外国人の願下に左右せらるるが如きに至ては実にまた卑屈も甚しと謂はざるべからず

「自立」の黎明期

- 同年、「京都青年会」でも「自立」に言及している。
- 一国と一身のあり方をつなぐ論じ方は、福沢諭吉の「一身独立して一国独立す」の影響を感じさせる。
- 共通しているのは、一国のあり方を論じるために「自立」を位置づけていること。

京都青年会による
「京都青年会雑誌」第2号（1889）

国立国会図書館所蔵

- 一国を富まし、一社会を成立し、一家を経営し、一身を持立する所由は其れ何くにかある。是れ余が**自立的性情**発暢の説ある所由なり。
- 人類は社交的の動物なり、人類は相互の牽引に由りて存する者たるを記憶せずんばあるべからず、此に於てか余輩は**自立性**発暢の手段として集団なる性格を採らざるべからざるを呈言せんとするなり。

「自立」の黎明期

- 福沢諭吉や徳富蘇峰らの近代思想が、初期の「青年」概念に大きく影響していたことは、これまでも指摘されてきた。
- 明治維新後の急激な西洋化を背景に、欧米に対抗し得る新しい「日本」の担い手となることが、外ならぬ青年（学生・書生等）自身によって自負を持って語られる際に、「自立」が用いられていた。
- この時の「自立」は、青年個々人の精神性に関わるものであると同時に、国のあり方に直結する概念でもあった。

「自立」の主導権

- 1900年頃から、青年像が変化し、学生・書生等だけでなく、勤労青年等も含めたより幅広い層を指す言葉になっていく。
（「青年というコトバの大衆化」）

「青年自立案内 大阪ノ部」（1909）
国立国会図書館所蔵

地方から出稼ぎで都市部（大阪）に来る「青年」に対し、様々な職業を紹介したものの。

現代我が日本の青年に最も必要な者は独立自存の気風であつて、青年諸子たるものは其貧富に係らず、各自の体格や芸能に応じてそれぞれ職業を選択して、大に奮励する覚悟がなければならぬ。

学問をするものは、多く士族の子弟に限られ、其希望も至つて単純で、恰も今日の士官学校の学生と同じく、前後は略ぼ、社会的、歴史的に一定されて居た、然るに今日の青年は、斯くの如き、狭隘なる範囲に限局せられず、何事も、一般的に其眼界が広くなり、学問を研究しながら、自ら将来の生活上のことをも、考慮せざるを得ざる位置に立至つた

田川大吉郎（衆議院議員）「青年の本分」
堺忠七編『新青年訓』洛陽社、1911

「自立」の主導権

- 日露戦争を直接の契機として、政府が青年団体への関与を強めていくこととなり、1915年には内務・文部両省による青年団体の指導に関する共同訓令が発せられる。
- 青年たちには、善き国民・公民になることが求められるようになる。

足立栗園「自立の青年 修養
講話」明誠館, 1922
国立国会図書館所蔵

大正四年九月十四日内務文部両大臣署名の下に、両者訓令として示されたる文字に曰く、
「抑々青年団体は青年修養の機関たり、其の本旨とする所は、青年をして健全なる国民善良なる公民の素養を得しむるに在り

「自立」の主導権

ここに自立をめぐる対立が生じる。すなわち、天皇制をバックにして政府が“上から”教化をつうじて国民の自立をすすめるのか、それとも民衆が“下から”自己の人権の実現をつうじて自立の理念をつくりあげていくのかという問題である。

折出健二『人間的自立と教育』青木書店, 1984

- 折出が「戦前の自立思想」としてまとめている内容に即して捉えれば、太平洋戦争以前の「自立」をめぐる議論は、青年たちから国家へと主導権が移っていく過程として捉えられる。
- 個々人の「自立」を通じて社会を変えていく構造から、既存の支配体制の中に青年が組み込まれていくプロセスへ。

「自立」をめぐる議論の趨勢

- 太平洋戦争後の、青少年に関わる「自立」をめぐる議論については、国立国会図書館サーチ及び国会会議録検索システムを用い、「青少年 自立」をキーワードに資料検索を行い、整理を試みた。
- 国立国会図書館サーチ：1,337件（1945～2022年）（※）
- 国会会議録検索システム：909件（1947～2022年）

※ 国立国会図書館サーチで検索した結果表示される資料の分析はまだ完了しておらず、本報告の内容は途中経過を示すものとなっている部分がある。

「自立」をめぐる議論の趨勢

- 自立をめぐる言説の時期区分については、先に国会会議録検索システムを用い、5つの時期に区分を試みている。

表1 国会における自立をめぐる言説の時期区分

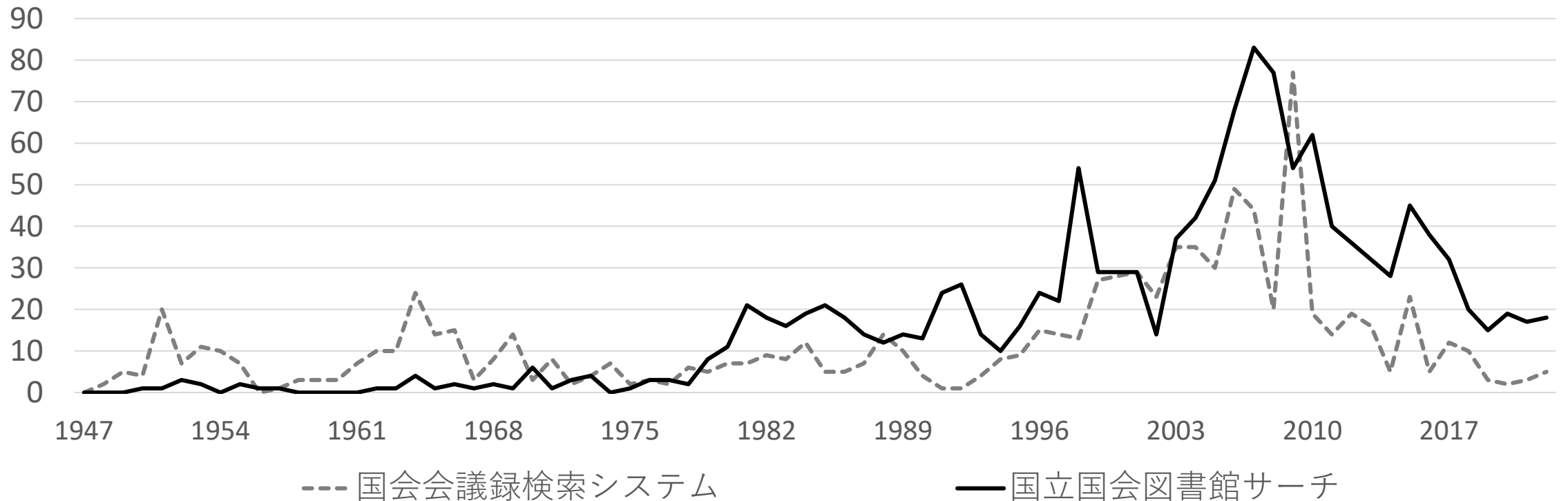
大山（2023）より

	時期	時代背景	青少年の位置づけ
国家・経済の自立	～1950年代半ば	戦後復興期。日本社会や経済の立て直しと、他国の干渉を受けない自立が求められる。	新しい社会の構築や、国家や経済の自立を達成するための担い手として位置づけられる。
産業の自立	1950年代半ば～1970年代前半	経済復興は達成されたと認識され、農村部から都市部への人口流入が課題化される。	都市部に流入した青少年を主な対象に、就業によって産業・経済を支えることが期待される。
教育的課題としての自立	1970年代前半～1990年代前半	連合赤軍事件を契機として、「人に迷惑をかける」ことが強く求められるようになる。	教育上の課題として、忍耐力等の用語を用い、発達段階毎の自立のあり方が言及される。
「主体性」と「自己責任」による自立	1990年代前半～2000年代前半	バブル崩壊頃から、企業を優先する生き方からの転換が主張されるようになる。	企業に依存せず、自己責任において選択・行動の主体となることが求められる。
政策課題としての自立	2000年代前半～	青少年の自立が政策上の課題となり、特に2000年代は国会での言及が大幅に増加する。	政策課題として位置付けられる中で、家庭や地域等の青少年を取り巻く環境が着目される。

「自立」をめぐる議論の趨勢

- 国会会議録検索システム・国立国会図書館サーチでの検索結果

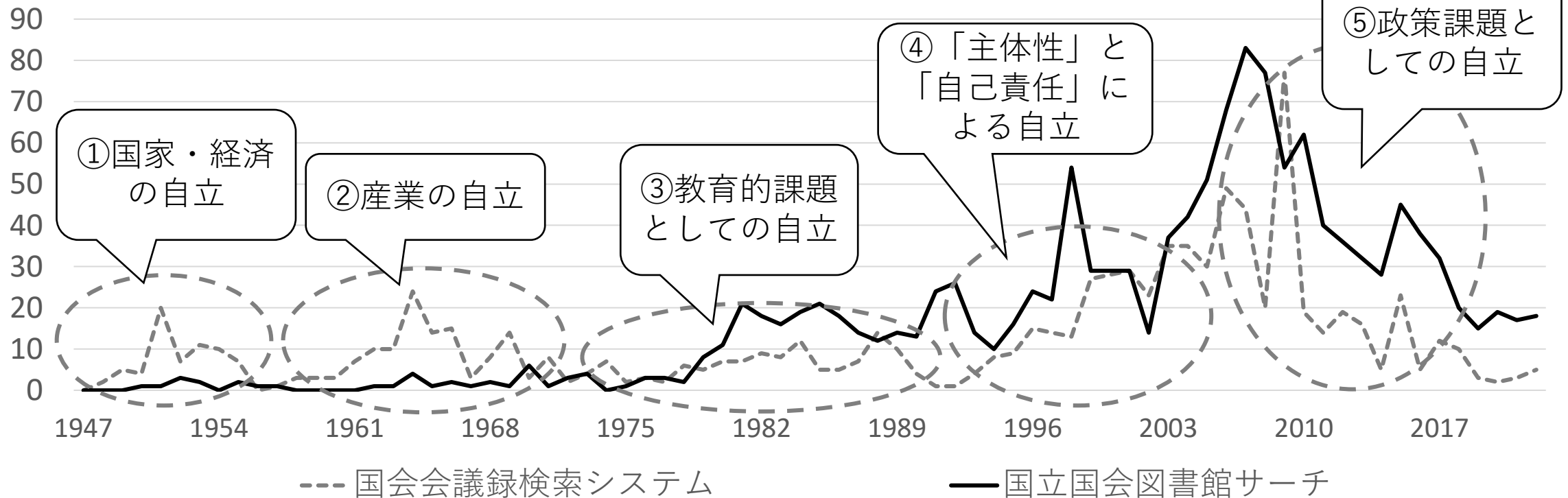
資料検索結果数



「自立」をめぐる議論の趨勢

- 検索結果に大山（2023）の時期区分を重ねた図

資料検索結果数



時期区分①：国家・経済の自立

【国会会議録から】

- 自立力行の精神は滔々として地を拂つて、その影を失わんとしておるのであります。而して我等の將來を託すべき青年のあり余る元氣は、ややもすれば労働爭議のお先棒に使われたり、或いは刃傷を事とする誤れる町の英雄となつたりしておるのであります。（田村文吉、第2回国会参議院本会議第21号、1948）
- 日本の経済の自立というような事柄をどのように解釈してこの法案（執筆者注：1951年に制定された産業教育振興法の条文）ができているのか、又はそれを教育の方面に移して見ました場合に、青少年たちにどういうふうにこれを指導しようとしているのか（矢川徳光、第10回国会参議院文部委員会第34号、1951）

時期区分①：国家・経済の自立

【一般資料から】

- 「他のどういう美点を具え長所をもつていても、無自立、無責任では信頼ある国民とはなれない。国家のため無用というよりも有害ともなろう。」
『若き公民』 1948
- 「経済の自立は日本人が再び独立自尊の精神に醒めるより外にはないのである。」 「職業指導」 24(2),1951
- 「民族的自立の精神とって見たところで、事実上は、諸君の盛り上がる精神に外ならないのだから、寧ろ僕は諸君の覚悟を伺い度いほどだ。」
『日本民族の進路』 1952
- 「個人の人格と個性、自由と自発性などの尊重という原理が今迄一方的に重んじられたので、これを生かし維持しながら、同時にまた万人共存、万人共栄の原理をも重視しなくてはならない」 『現代日本教育の根本問題』 1955

時期区分①：国家・経済の自立

【この時期の自立】

- 国家や経済の自立（独立）のために青少年に期待する視点がおおむね共有されていた。一方で、青少年の力が必ずしも国家・経済の自立に結びついていないことが課題化されることも。
- 精神面への言及が多く、青少年に担い手としての自覚を求める内容が中心。その一方で、産業教育への言及等はあるものの、個々人の能力についてはあまり触れられていない。
- 国家の自立と個人の自立を重ねる構図は戦前の議論と重なる。一方で、急激な国家・社会の変化への戸惑いも表出されている。

時期区分②：産業の自立

【国会会議録から】

- とりもなおさず農村において必然的、合理的に出てくるであろう青少年に対しまして、新たなる教育の場を提供し、よってもって安定した半失業者的な立場から完全に自立できる職場に導き入れたい（荒木萬壽夫国務大臣、第38回国会衆議院文教委員会第24号、1961）
- （少年院を退所した青少年に対して）そういった少年の職業訓練施設の充実をはかりたいと思っております。そういう努力を今後続けることによってのみ少年が社会に帰って自立するための方策になるのではなかろうかと考えております。（副島和穂、第46回国会衆議院文教委員会第6号、1964）

時期区分②：産業の自立

【一般資料から】

- 「青少年の自立、とくに職場における自立—自分を生かす—の問題が、青少年の側だけの問題としてとらえられうる筈はなく（後略）」『自主性：そのトレーニング』,1964
- 「子ども自身のなかから生じてくる発達的变化や力に、側面から手を貸して、それが、他の形を持つものにならないよう、自立心という形にととのえられるように助けてやる」『婦人之友』58(7),1964
- 「自主・自立の精神をモットーとした生徒会、これが南農の生徒会である。生徒の力で問題を解決し、生徒の力でこの学園を改めていかなければならない」『集団づくりの新しい展開』,1968

時期区分②：産業の自立

【この時期の自立】

- 「根性のない」青少年向けに「人づくり」が叫ばれているという指摘も。国会が就業の必要性を論じたのに対し、一般的には職場で力を発揮できない青少年を課題化したか。
- 年少の子どもの「しつけ」や、学校教育の取り組みと関連付けながら「自立」に言及する資料も登場する。「自立」を発達段階上の課題とする視点を先取りしているか。
- 資料数の推移から考えても、時期区分自体はおよそ妥当ではないか。ただし、内容は教育的な観点も大きい。

時期区分③：教育的課題としての自立

【国会会議録から】

- どんな人になってほしいですかっていうことを聞きますと、これは大体、赤軍事件ぐらいを境目にいたしまして大変大きく変わっております。それまでは、いわば自立できる人とか、自主的な人間、あるいは個性を伸ばすなどということが大変多く返ってくる答えだったんですけど（樋口恵子参考人、第75回国会参議院文教委員会第17号、1975）
- 大人になっていく過程においていろいろむずかしい問題に直面をいたします。いろいろな意味で自立をしていかなければならないのですが、それまで（執筆者注：思春期に至るまで）依存をしてきております。（永井道雄国務大臣、第75回国会参議院予算委員会第13号、1975）
- たとえば児童の自立心とか忍耐力、あるいは連帯意識などが日本の子供にはやや希薄なのではないか（松浦泰次郎政府委員、第87回国会衆議院内閣委員会第13号、1979）

時期区分③：教育的課題としての自立

【一般資料から】（混迷する青少年像）

- 「現代の青少年の問題として考えられなければならない「自立心の欠如」」 「社会教育」 36(11),1981
- 「大した努力をしないまま、自分の将来にあまり明るくない見通しを抱くシラケ層が着実に増えている」 「内外教育」 (3308),1982
- 「なにか主張をもって集まってくるというものが青年だと、僕ら思ってたんですが、七〇年安保でメタメタにやられてしまって手も足も出ない状況になった」 「月刊高校教育」 16(1),1983
- 「まず、がまんすること、耐えて頑張り抜こうとするたくましさにかけていますね。」 『自立・参加・連帯：あたたかいふるさとづくりをめざして』,1985

時期区分③：教育的課題としての自立

【一般資料から】（新しい「自立」観の模索）

- 「自立ということは、普通、自分の力で身を立てることを意味するが、発達心理学的には、他の力を借りずに自分だけの力で物事をなし遂げることという意味と見てよいであろう。」「児童心理」33（4）,1979
- 「依存と自立の関係をなんとなく反対の概念のようにとられ、依存が減れば自立が多くなるように考えがちであるけれども、そうではない」 「女性教養」(504),1981
- 「正しい意味での「個」や主体性が獲得できず、途中で孤立という方向にそれてしまいそうにさえなっています。」 「子どもが自立するということは…：’83神戸青少年問題シンポジウム(記録)」,1983
- 「子どもたちに「自分らしく生きる」ことを教えてほしい。それは決して「ひとりよがりである」ことを助長するためではなく、個人主義の基本である「個の自覚」「個の確立」のためである。」 「教育心理」35(1),1987

時期区分③：教育的課題としての自立

【この時期の自立】

- 70年代は青少年の変化に直面し、社会側も混乱しながら接し方を模索していた混迷期として捉えられる。
- 80年前後から、「依存」や「孤立」との関係性について議論するものが増える。個人主義化した社会の中で、他者とどのような関係性を取り結ぶのかを模索していたか。自立を「基本的には、子供自身の問題」として位置づける資料もあり、自己責任論との向き合い方も問われ始めている。
- 個人を基盤とすることは共有しつつ、そこから他者にどのような視線を向けるかが問われている。

時期区分④：「主体性」と「自己責任」による自立

【国会会議録から】

- 個性豊かな自立した人間性を育てるため、学歴偏重の弊害を是正しつつ、主体的、創造的に生きていく能力を育て、一人一人のよさや可能性を伸ばす教育を目指して教育改革を推進し、生涯学習社会の構築を図っていくことは、文教行政の最大の課題であります。（赤松良子国務大臣、第129回国会衆議院文教委員会第2号、1994）
- 青少年が、いろいろな人間関係とか、自然体験あるいは社会体験、そういったものを通じて社会性とか主体性を習得して、個性を伸ばしていけるような多様な活動の場を提供していくこと（馳浩、第150回国会衆議院青少年問題に関する特別委員会第2号、2000）

時期区分④：「主体性」と「自己責任」による自立

【この時期の自立】

- 自分で考え選択・行動をしていくことが求められており、その際にキーワードとなっているのが「個性」「主体性」「創造性」等である。
- 「体験」によって主体性等のキーワードを育み、自立した個人となることが想定されているが、具体的に何を体験するべきなのかは示されていない。
- 国会の議論においては教育上のカリキュラム等への言及も増加してくる。「自立」がより教育的に捉えられるようになってきている。

時期区分⑤：政策課題としての自立

【国会会議録から】

- 企業実習と一体となった教育訓練の実施、地域が民間を活用して実施する若者向けの職業紹介など、若者自立・挑戦プランを実施します。（小泉純一郎内閣総理大臣、第159回国会衆議院本会議第1号、2004）
- 新しい時代を切り開く、心豊かでたくましい日本人の育成を目指し、画一と受け身から自立と創造へという基本理念のもとで、初等中等教育から大学までを通じた教育の構造改革を進めてきたところでもあります。（河村建夫、第159回国会衆議院文教科学委員会第1号、2004）
- 地域をどう子どもたちのためにつくりかえていくのか、家庭をつくりかえていくのか、何が失われたのかということの議論が私は一番大切だと思うんです。その結果、自立した、そして健やかな子どもが育っていくんだというふうに思っています。（荒井聰国務大臣、第175回国会衆議院青少年問題に関する特別委員会第4号、2010）

時期区分⑤：政策課題としての自立

【この時期の自立】

- 「若者自立・挑戦プラン」をはじめとして、政策名に「自立」が用いられることが増え、特に2000年代半ばに資料数は急激に増加する。
- ニートやフリーター等の課題化と結びつき、次第に就労を重視する傾向が強くみられるようになる。
- 教育効果を高めることを目的に、地域や家庭のあり方に介入する論調も登場する。自立によって青少年が社会に貢献する構図から、社会が青少年の自立のために位置づけられる構図へ変化。

自立をめぐる論点整理

- 戦後初期は「自立によって青少年が国家・社会に貢献」することが想定されていたが、近年は「国家・社会が青少年の自立のために貢献」することが論じられるように。
 - 国家・社会と個々人の関係性が問われる。
- 福沢諭吉以来、個人主義社会における生き方が問われ続ける中で、他者との関わり方が課題化される。
 - 個人主義と自己責任論の関係性をどう捉えるか。
- 個人主義社会を前提とした、個人と社会の関係性の構想とは？

「社会参加」からのヒント

- 1970年代の都市部における勤労青年の「社会参加」に関する活動から、個人主義社会における社会との向き合い方を考えるためのヒントを得ることができる。
 - 個々人の自由をどのように保障するかが問われた際に、どのような構図が考えられるか。
- 都市勤労青年の全国組織である日本都市青年会議は、「社会参加」をキーワードに活動していた。
 - 生活課題を集約する形で「社会参加」が見出される。
 - このテーマにどのように向き合うか、二通りの方向性が示される。

「社会参加」からのヒント

• 日本都市青年会議大会分科会の変遷

日本都市青年会議 内容についての資料

オ1回大会	オ2回大会	オ3回大会	オ4回大会
開催日 1969 - 5/3~4	1971 - 5/3, 4, 5	1972 - 4/30 5/1	1973 - 5/4, 5
場所 大阪市	京都市	東京都	名古屋市
記念講演 「都市における青年の役割」 京大 市村 英一 「青年の生き方」 華師 高田 好胤	現在の世界情勢下における 都市の動向と日本」 東大 磯村 英一 現代の性とモラル」 木崎 国嘉 「東京都の青年像」 立命館大 末川 博	「青年の生き方」 提 涌二 「日本都市青年会議の期待」 寒河江 善代	「東京都創造のための市民参加」 足立 省三 「人間と環境 (ハコロジー 環境について)」 真鍋 博
テーマ 分科会 青年と街づくり 青年と公德心 青年と交通問題 青年と政治 青年と住宅問題 青年とスポーツ レクリエーション 青年と万国博	青年の性とモラル 都市青年と社会環境 食品、都市公害 環境汚染(大気、水質、騒音) 青年活動とその施設	創造する青年活動 青年の社会参加 望ましい施設と推進者	都市青年運動の展開と期して 創造する青年活動 青年の社会参加 望ましい施設と推進者

- 交通問題や住宅問題、環境問題等が統合される形で「社会参加」が見出される。
- テーマが統合・抽象化される過程は、多くの人を巻き込み、組織の拡大が志向される過程と重なる。しかし…

「社会参加」からのヒント

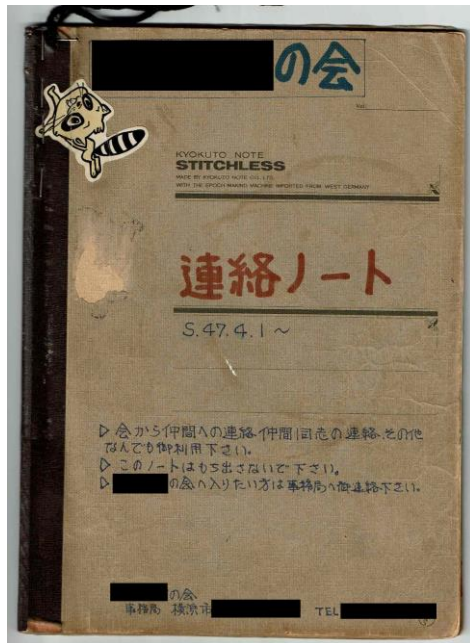
- 組織化を通じ、闘争に向け団結を高めようとする論調には、外ならぬ都市青年自身が疑義を呈している。
 - ▶ 団結するのは良いが団結して何をしようとするのか！
 - ▶ 題材のベースとしてのテーマが大きすぎて概念的に分かり合っても、実質的には何も分かっていないと言えないだろうか。
 - ▶ 形を変えて、地域現場に根ざした研究（例えば、都市の交通、住宅、教育問題や、日本古来の伝統文化。）を発表する方が、地域住民の関心を引き起こす事ができるのではないだろうか
(第8回千葉大会に横浜市から参加した人たちが作成した報告書の記述より)
- 「交通問題」「住宅問題」は第1回大会の分科会テーマだが、それをまとめて案出されたはずの「社会参加」というテーマは青年から共感を得られなかった。

「社会参加」からのヒント

大山 (2022) より

表1 横浜市の青年サークルメンバーの手記 (一部抜粋) 1972~73年分

- 寂しさ等の素朴な感情で集まりながら、様々な活動に参加していた。
- 多世代での協働も。



1972年5月9日	(他の団体から届いた、ベルマーク集めへの協力を求める手紙を貼り付け) こんな手紙が届きました。協力してあげたいと思います。
7月1日	7時40分にいこいの家につきました。だれもいませんでした。(中略) 8時20分、Aさんがきました。Bさんに用があると。もっとほかの人も来てくれないかなア。連絡しとけば良かった。
9月9日	今日は雨。皆さんきてないかなと思っていこいの家に電話してみました。どうでしょう、だいぶきていたんですよ。へエーて!! 感心しちゃった。
10月25日	今日は別に例会日でもないのにやって来ました。実は今度〇〇(このサークル名)で模擬店のおでん屋をやることになったので、そのため文化祭実行委員会のある日にはこうやってよばれもしないのにノコノコと顔を出すのです。(後略)
10月(日付記載なし)	南区で活動してる社活グループより、古切手の募集について協力の依頼がありました。この古切手を現金にかえ各福祉施設等にて使われます。(後略)
10月31日	例によって別にこれと言った事もしないのにやってきた。(中略) 7時半にBさんが顔を出した。なるほどもうすこし待てばこりやまだまだくるかもしれないゾ。
1973年3月30日	何となく、仕事が終わり、いこいの家へ、気がさそう。別に用はないが若者が集まる。この家は心が休まる。
4月10日	今日はC君が皆でカウベルへ行こうなんて提案したので例会日でもないのにやって来たわけです。あいにくの雨、ホントにやりきれない。(後略)
4月28日	今日この室にはいっておどろきました。新しい仲間がだいぶまじってD君達を中心にして楽しそうに話してました。やるもんですね。(後略)
8月11日	若いみなさんはプライベートタイムの時間だけど、小生デートする相手はいないし、結局この場に遊びに来るのだが、あいにくと本日は私一人。(後略)
9月8日	最近なんといったら良いか以前の様なやる気が出てこないのです。自分でお前は何のために〇〇にくるのか、なんとなくヒマだからさ。家にいても面白くない。それじゃ楽しくないだろ。でも結局こんなもんじゃないかな。皆なんとなんか集まって、いつのまにか消えてゆく。こんなものかもしれません。(後略)

横浜市の青年サークル連絡帳から抜粋して筆者作成

「社会参加」からのヒント

• 2つの社会参加観

大山（2022）より

表2 2つの社会参加観

	闘争としての社会参加	「暮らしにくさ」による社会参加
社会参加の方針	目的的。課題を見極め、望ましい環境になるように、行政等に対して要求を行っていく。	派生的。必ずしも事前に望ましいあり方を構想してから活動するのではなく、課題があればそれに取り組んでみる。
社会への関わり方	「要求」に応じて闘争。より望ましい環境になるよう、行政等への影響力を確保。	交渉、協力。活動によって社会のあり方に働きかけ続ける。直接的な環境改善。
組織のあり方	必要。組織が強固であるほど影響力が増す。強化・拡大を目指す。	関係性を媒介として「興味」が伝わる等、あればできることが広がる。ただし、厳密には組織よりも関係性そのものが必要。
青年の位置づけ	世代間の対立が前提。社会的に弱い立場。権利を行使する主体。	地域社会の一員。同じ環境を共有する人とは対等。
青年同士の関係性	実践的。疎外の要因を明かにするために、相互に学び合うことが求められる。	情緒的。寂しい、もしくは楽しい等の「興味」によるつながり。

「社会参加」からのヒント

- 個人主義社会において、個々人の生き方はどのように希求されることになるだろうか。
 - 「要求」を通して実現しようとする場合、要求先に対する影響力を如何に保持するかが論点となる。
 - 個人であれば資質・能力、集団であれば規模や団結力。
 - 青少年に対して教育的に関わることが志向され得る。
- 一方で、共生による社会参加を構想するならば…？
 - 青少年はどのような存在として位置づけられ、彼らには何が求められるだろうか

本日の報告に関する資料

- 大山宏（2017）「青年期に求められる自立に関する歴史的検討」日本社会教育学会編『子ども・若者と社会教育』東洋館出版
- 大山宏（2021）「高度経済成長期以降の都市青年にとっての社会参加の意義」国立青少年教育振興機構青少年教育研究センター『青少年教育研究センター紀要 第9号』
- 大山宏（2022）「闘争から共生へ—都市青年の生き方へのまなざし—」牧野篤編著『社会教育新論「学び」を再定位する』ミネルヴァ書房
- 大山宏（2023）「戦後日本の青少年教育政策における自立概念の検討」国立青少年教育振興機構青少年教育研究センター『青少年教育研究センター紀要 第11号』